

向き合い、支援につなげる希望の医療を

医療法人社団清山会理事長
いずみの杜診療所

山崎英樹 先生

認知症に対する不安を、いま多くの人を抱えています。予備軍を含め800万人以上が認知症と言われる中、当事者がその思いを発信し、偏見のない暮らしやすい社会を求め、動きが広まっています。「当事者の視点」は医療にも変化をもたらししました。

確定診断は専門医が慎重に

認知症の原因疾患はさまざまです。昔は「アルツハイマー型認知症」は日本人には少ないと言われていました。しかし、のちに多いことが分かり、さらに「レビー小体型認知症」の存在が明らかになり、最近では後期高齢者の発症はアルツハイマー型とは別の「タウオパチー」が原因、と指摘されています。このように発展途上にある分野ですから、確定診断や薬の処方では慎重に行わなければなりません。

最初の診断はやはり専門医が適

切です。「日本老年精神医学会」「日本認知症学会」が認定する専門医（それぞれのホームページで紹介）や、仙台市の「認知症疾患医療センター」（いずみの杜診療所・東北医科薬科大学病院・仙台西多賀病院・東北福祉大学せんだんホスピタル）がよいと思います。心配な人はかかりつけ医に相談し、早めのタイミングで紹介してもらうことをお勧めします。

早期の受診をお勧めするのは、一つは、「正常圧水頭症」などの治る認知症を逃さないため。もう一つ

は、アルツハイマー型などの場合、進行には個人差がありますが、早い段階で今後の暮らしに備えるためです。

本人尊重の丁寧な医療

最初の受診は誰しも不安です。中には家族に背中を押されて不本意な表情の方もおられますが、診察して丁寧にと説明すると、「違和感の原因はこれだったのか」と納得されたり、納得はできないけれど「礼儀正しい態度をとる人間（医者）の言うことだから聞いておこ



う」と通ってくださったりします。後者の背景には、「今まで自分の言うことを聞いてもらえなかった」「否定されたり、軽んじられたりした」という思いがあります。

私自身も、かつては患者さんに大変失礼な態度をとっていました。本人を目の前に、家族の話ばかり聞いて診察したつもりになっていたのです。「本人抜きの医療などありえない」と気付き、きちんと向き合うことを心掛けるようになったのは、丹野さん(特集03参照)はじめ、発信する当事者との出会いがあったからです。

「障がい」と「人権」

私は、認知症は「疾患」という側面はあるものの、「障がい」と考えた方がよいのではないかと考えています。

医療の視点ではなく、本人の視点に立つと、認知症というだけで

偏見を持たれたり、閉じ込められて行動を制限されたりすることに強い抵抗感があります。一人の人間として主体的に生きる権利が、「病気だから」「危険だから」という理由で簡単に奪われてしまう。この現実を、当事者たちが声を上げるまで目を向けられませんでした。

障がいのある人の人権が守られるように、認知症の人の人権も尊重される社会であってほしい。診断後の人生を自らの力で再構築できるよう、対話や配慮のある環境を作ってほしい。「早期発見」を「早期絶望」にすることなく、「希望のあるもの」にしたいのです。

揺れる家族の心理

一方、家族には家族の事情や心理があることも承知しています。家族に対しては、話を聞いて、本人の言動の意味を「翻訳する」のが

私の役割です。画像を見ながら言うことを聞いてくれないのは、この部分に障がいがあつて、理解するのが難しいからです」となどと伝えます。ただ、その場では納得されても、家に帰ればまた、なんて聞いてくれない」となります。そうなるのは当然のことで、行きつ戻りつしながら、少しずつ「割り切り方」を得ていく方が多いようです。

ピアサポートと家族会

「仕合わせの会」は、認知症の診断を受けた人は誰でも参加できる会です。当事者だから話せること、聞けることがあり、診断後の不安を乗り越えてきた経験者の言葉は、他では得難いものです。

同じように、各地の「家族会」は自分と同じような体験をした家族との交流があり、自然な形で励まされます。気持ちを聞いてもらえ、人がいるのは大切なことです。

仕合わせの会 (問い合わせ:いずみの杜診療所地域連携室 022-341-5850)

仙台市市民活動サポートセンター
毎月第3土曜 10:30 ~ 12:00

いずみの杜診療所2階カフェルーム
毎月第1・第3の火曜と木曜 9:30 ~ 12:00